

日本プロレタリア文学集・22



レタリァ文学集・22

人作家集 2

江苏工业学院图书馆
藏书章

日本プロレタリア文学集・22

婦人作家集(二)

定価 二八〇〇円

一九八七年十月三十日 初版◎

発行者 山 本 功

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六
電話 (〇三) 四二二一八四〇二(営業)

(〇三) 四二二一九三二三(編集)
振替番号 東京三一三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布
することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の
権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN4-406-01555-8 C0393

日本プロレタリア文学集・22

婦人作家集
(二)

目次

松田解子

産む	九
乳を売る	三
風呂場事件	三
行く者帰る者	三
重役は云ったが	四
卵	七
勘定日	八
白と黒	八

ある戦線	九二
飯場で	一〇六
そだち	一三三
大鋸屑	一五二
行進図	一六二

佐多稲子

キャラメル工場から	一五九
女店員とストライキ	一六九
煙草工女	一八二
自己紹介	二〇八
四・一六の朝	二二三
研究会挿話	二三六
幹部女工の涙	二三八

小幹部……………二四九

祈　　禱……………二五三

強制帰国……………二五八

何を為すべきか……………二九三

初めての経験から……………三一九

生活の権利……………三四〇

進　　路……………三四六

恐　　怖……………三五八

独り立ち……………三六四

村山 籌子

健康な女の子……………四二一

田　島　ユ　キ

セリブレン……………四七七

逆襲	四三
----	----

佐藤 さち子

哀号！	四二
-----	----

団長選挙	四三
------	----

解説	四一
----	----

発表年月日と掲載文献	四六
------------	----

松
田
解
子

産 む

煙と塵埃の、おもくるしく立ちこめた大氣を裂いて、八月の太陽が、すばらしい光と熱度を、本所いっただいに投げつけている。

貧民窟のトタン屋根も、耶蘇やその学校も、小路のドブ板も、共同便所も、そして、クソバエの羽さえも、それぞれの色とにおいを、ぞんぶんに発散している。そのなかを、かの女は、まるで刑でもいいわたされた囚人のように頭をたれて歩いた。

「おかあさまでいらっしゃいます。もう五ヵ月ごろかと思えます」

そういった産婆の声が、まだ意地わるくかの女の耳に、ふみとどまっていた。自転車自転車の警鈴、こどもたちのさざめき、おとなの忙しげな歩調が、四方八方から、かの女を追

っかけ、こづき、あるいは威嚇する。かの女はますます低くうなだれて、のめるようにすすんだ。

とうとう孕はらんだ！

とうぜんすぎるそのことが、いまは絶望となり、汗ともなつて、ぶきみにかの女の全身を濡らす。

——夜。月も星もない。ただ、蒸すような暑さが、無数の蚊とともにおそってくる。

かれらは二階間借の四畳半の雨戸をあけはなして蚊帳をつつた。

「いやな世のなかだなア。親自体が生きられない。せつかく出来でした自分らの子どもさえ、安心して産めないなんて……」

かれが伸びきった髪をつかんでためいきといっしょにはき出すようにいう。

「いいわ。わたしがうんと働いてそだてるから」

だが、なんという矛盾だろう。ある惨忍な思いが、電光のようにかの女のむねをかすめた。——それにつれて、強烈な毒薬をのみくだす一人の妊婦が、ふとんの下に赤子をふみつぶす一人の母親が、まざまざとかの女の眼のうらに映った。

「また、はじまったな」

やがて、かれらはたまたまなくなって舌をうった。

四、五日まえから気のくるった近所のおでん屋の親爺の、のろわけなきけびが、下の露地から上ってくる雑音のなかにも、はっきりと聞きとれる。

「さあ、みなさん、一銭でもいいから買いなさい。おでん、おでん」

つづいて野次馬たちの笑い声がどつと湧き上った。

かの女の目には、耳朶<みみづかみ>まで赤い血をのぼせて、おそろしい怪物でも見えるような目つきで、こどもたちに投げつけられたマリをにらみ、

「このなかに化け物がいるぞ」

などと口走りながら、長い棒のさきで、けんめいに突こうとしている気ちがいの姿が見えるようだった。

「ね、あんたがた、見せ物じゃないんだから、さつさと、どいてください」

四十ぐらいの、頬骨のたかい、目の落ちくぼんだ妻が、人を斬るような表情で、群衆を追いつらそうとするのである。母をよぶ、子どもらの泣き声。気ちがいのおでん屋を引立ててゆくこうとする白服の巡査たち。……かの女はなぜか、自分の将来を、あの不幸な妻に見せつけられたような気がしてならなかった。

「いくじがなさすぎるのだ。これくらいのことを。なぜ、あくまでも産み、あくまでも育ててゆくこととしないのか」かの女は、そう、こころのうちにきけんだ。

その夜、あけはなした雨戸のそとに、赤い蛇のように曲りくねった稲妻を、かの女はながめた。地球を裂き、くだこうとするかのような雷鳴を聞いた。あたかも一つの、あたらしい世界をはじめるために、てつてい的な破壊をもくろむ魔神が、巨大な暴力をふるっているかのような夜を。そして、ちから強く、自分の腹壁を内部から蹴る胎児を意識した。やがて血みどろの苦悶のなからうまれ出るはずの、ひとつの生命を。

「生まれろ、かれがいなくなつて生まれてしまえ。どんなにでも働いて育ててゆくから」

かの女は、ふろしき包み一つでとびこんだ施療院の灰色の天井をみつめて、歯をくいしばった。暗い留置場のすみから、かれが、疲労に濁った目をみはつて、力かぎり、自分をはげましているような気がした。

「よろこんで、生むんだぞ、——と。」

かの女は目をつむった。

多角な岩塊でも、はらのなかであばれまわるような陣痛がはじまった。

その十時間後、……………

「もう、すぐですよ」

産婆が、白いものを、かの女の口にさし出した。つめたい水が、かの女の意識をよびもどした。

「まあ、なんて大きな男の子」

髪の毛のふさふさとのびた、かれんな男の子が産婆に抱きあげられて、けんめいな呱呱の声をあげていた。

かの女は、さけぶべく、笑うべく、あまりに幸福であつた。あまりに安らかなきもちであつた。

かれの友だちのTが、ほどなく、かの女の産室のドアをあけた。

「あしたの朝、早く釈放^だすそうだ。さぞ、よろこぶこつたろう。ずいぶん、なかで心配してたようだから」

かの女は、嗜^しればれと目をみひらいて、Tを、それから周囲をみまわした。まずしく、わかい母たちが、かの女の右にも左にも、赤子を抱いて、やすらかにねむっていた。

かれが、「失業者に職を！」の、ひとにぎりのピラを内ポケットにしのばせ、Tたちといっしょに家を出てから、ほぼ三十日目の暗い夜が、しだいに仄明^{はく}るい黎明へと時をきざんでいった。

乳を売る

市電をお茶ノ水で降りて雨しぶきの下に傘をひろげ、用意の地図どおり十分も行くと、黄褐色の鉄筋二階建が、無骨な両腕と正方形の腹部を雨空にさらして寝そべっているのが目に入った。近づくとき強烈な消毒薬の臭気や、動く白ずくめの人間の脈搏が感じられた。

『小児科 柏原病院』

光枝は、そこに立った刹那、ただ一人、敵国にでもふみこんだように緊張した。つややかにみがいた長い廊下を行く。

〔老等室 片野繁殿〕

ドアをひらく。いっせいに室内の視線が雨しぶきで濡れた母と子を射すくめる。まぶしいなかで、どうにかあいさつをすませると、すぐ背中の子をおろしてみる。が、子ど

もはとたんにわつと泣きながら顔を母親のふところにかくしてしまふ。――圧迫感からなのか羞恥なのか。――室の中央に腸をわずらう『若さま』。その枕元に附添い看護婦、右手に女中、左手に若さまの母夫人。夫人は散りざわの牡丹の花のようにぼつてりと艶でな白い顔をこちらへむけ、大きな青い石のハマった指輪の指を浅く組んで、新たに買い入れた母乳の所有者を流し見ている。

「ずいぶんやせてるね、その子。何ヵ月目だつて」

「七ヵ月目です」

「乳はたくさん？」

探査の目付だ。

「たくさんというほどではありませんけれど、だんだん離乳したいと思っていますので」

「そうか。なんなら牛乳でもフードでもやったらいいよ。

……あ、たみえ、あとでこの乳母を診察室につれて行くんだよ。血液検査をして、それからご飯を食べさせるようにね」

顔にソバカスの出た女中がなれなれしくうなずいた。やがてかすかに絹のかけぶとんを動かして若さまが目をさました。

夫人が言った。

「お乳がのめるよ。繁しげ。こんばんから、お乳がたくさんめますよ」

光枝はその言葉に寒氣を感じた。……

夫人はつぎにその光枝にむかつて、

「乳はたいいてい三時間おきにしぼるからね。だからそれまで、ちゃんとためておくようにすればいい。その子には、（そこで、夫人は光枝の子へ視線を移して）しぼったあとをのませるようにして。……足りなかったらほかの物をやって。……さア、繁、あ、く、ちゅ、……」

こんどは猿のようにやせ皺のよった息子に手をさし出した。息子は雲母のように生氣のない目をみひらいてしぼるくは無表情であつたが、やがて火箸のように細まった右手を母にあずけたままふたたび目をつむつた。附添いの看護婦は、鼻孔のふちや瞼の内側までぬりかためた白粉で、ほとんど地肌をかき消していたが、それでもこの『ご親子ご対面』の一齣へ、しきりに媚笑をふりまいていた。

注射針が光枝の右腕の静脈に突き刺された。刻一刻、ブドー酒いろの血液が透明なガラス管を浸してゆく。約五センチ。看護婦の白衣の腕がぐいと動き、針はぬきとられた。光枝は長い廊下をつたわってくる気ちがいじみた子どもの

泣き声を聞きながら急いで胸前をかきあわせた。

パスしたい！

なんという態だ！

どちらもが本音だった。

夢中で駆けつけ、女中の手から子どもをもぎ取った。

「何時ごろ、しぼるんですか」

「お乳？ きようはしぼらないのよ。血液検査がちゃんと合格してから」

「では、のませてもいいんですね」

しかし子どもは餓鬼の性急さで疾くにしがみついてしまっていた。そのままの恰好で病室へはいると、目をさましていた若さまが急に泣き出した。

「あ、いけないのよ。そんなところでお乳を出しちゃあ」女中が怒りっぽくきけんだ。光枝はふたたび廊下に出た。歩きながら、幾度も幾度も子供を抱きかえ、ふたつの乳房をとりかえては吸わせた。そして低く、力をこめてさやいた。

「ね、ぼうや、あのお坊っちゃまが泣いてるよ。おまえのおっぱいが欲しいってさ。……」

急に光枝は空腹をおぼえた。

院長、副院長、医員、看護婦長、看護婦の、ものものし

い行列が、母子の前をとおりすぎた。

『ご回診』がすんで、いよいよ昼食になろうというとき、これも貧困に疲れはてたといった三十もどきの母親が前にごみに入ってきた。

「この人が今度きた乳母さん」

女中がそう言って、その女性に光枝を紹介した。

「まあ、お若いんですね。……じゃあ、わたしなんかより、ずっとよけい出るでしょう。よろしいんですわね」

「いいえ、わたしの、そんなにたくさんじゃないんです」
「まあ拝見」

光枝はめんどくたった。が、だまって片方の乳房をとりだした。

「ほらね、……そんなにふくらしていらっしやるんですもの」

病室につづく小部屋で同じ食堂から取った『定食』を食べているうちに、お互いの胸に一種同族の思いがわきはじめた。

「お子さんがありますか」

光枝がきいた。

「ええ、やっと三つになるのがいますの。乱暴で、しょうがないんですよ」

「そうですね。わたしも、あんなのがいますから」

隅の、便器棚のカーテンの下に、泣き疲れて眠っている自分の子どもをゆびさして光枝は言った。

「難儀しますよ、かわいそうに……」

あとで、女中たちの言うところによれば、かの女はクリスチャンだった。片野家に初めて来た晩に、女中部屋で本式のお祈りをやった。ほかの女中たちがあつ氣にとられていると、かの女は憐れむように、「神様は、あなたがたの罪をもお許しくださるでしょう」と言ったとのことだった。数えの三つという女の子は、どんな事情の子とも知れなかったが、かの女はその子を盲滅法に愛していたというカドで、夫人の氣に入らなかったのだ。

「子どもを托児所にやれて、奥さまはおっしゃるんですよ。だけどあなた、数えのたった三つですもの、何度門までつれて行っても、わたしの手から離れないんですよ」

廊下に出てからしみじみともらした。そのとき後から走ってきた、目玉のくるくるした可愛らしい女の子が、どしんとかの女にぶつかるようにして飛びついた。

「でも、あまり、心配なさらないほうがいいですわ。こんなかわいらしいお子さんがいるんですもの」

「だけど父親のない子は不幸ですね。……わたし、きつと、